

知求会ニュース

2005 年 09 月

第 15 号

◎ 秋季修了おめでとうございます！

藤田敏文さんと矢澤寿和さんが 9 月 30 日に、平成 17 年度国際学研究科修士課程を修了される予定です。本当におめでとうございます。去る 8 月 3 日(水)午後 3 時 30 分から 5 時まで、夏休み前の忙しい中、お二人の修士論文最終発表が行われました。

◎ 宇都宮大学大学院国際学研究科公開授業の案内

国際学研究科では、ひろく一般社会人を対象に、「国際化と日本Ⅰ」をサテライト公開授業として、以下の内容でとちぎ国際交流センター(宇都宮市本町 9 番 14 号)にて開催します。
公開授業科目 国際学総合研究 B 「国際化と日本Ⅰ」

市民レベルの国際交流・貢献に向けて(1)ー現状分析と展望ー

10 月 15 日(土) 午後 1 時 30 分から 4 時 30 分 小池清治教授

「国際語としての日本語」

10 月 22 日(土) 午後 1 時 30 分から 4 時 30 分 友松篤信教授

「開発途上国における日本の N G O 活動」

10 月 29 日(土) 午後 1 時 30 分から 4 時 30 分 渡邊直樹教授

「ヨーロッパの移民政策と日本居住の外国人」

11 月 05 日(土) 午後 1 時 30 分から 4 時 30 分 田巻松雄教授

「外国人の子どもの教育・生活環境と国際化・国際交流の課題ー栃木県内の実情を中心に」

11 月 12 日(土) 午後 1 時 30 分から 4 時 30 分 柏瀬省五教授

「国際交流・貢献活動における英語コミュニケーション」

市民レベルの国際交流・貢献に向けて(2)ー歴史と方向ー

11 月 19 日(土) 午後 1 時 30 分から 4 時 30 分 中村 真助教授

「国際交流における非言語的コミュニケーションの役割」

11 月 26 日(土) 午後 1 時 30 分から 4 時 30 分 高橋若菜助教授

「地球温暖化交渉における市民レベルの国際交流」

12 月 03 日(土) 午後 1 時 30 分から 4 時 30 分 松尾昌樹講師

「西アジアをどう見るか」

12 月 10 日(土) 午後 1 時 30 分から 4 時 30 分 中戸祐夫助教授

「アメリカ・日本・韓国をめぐる国際関係」

12 月 17 日(土) 午後 1 時 30 分から 4 時 30 分 阪本公美子講師

「アフリカ農村における参加型調査と国際協力」

この公開授業の募集人員は 30 名で、受講料は無料です。申し込み方法は、住所・氏名・連絡先を記入の上、はがき、ファックス、Eメールのいずれかの方法にて、申し込んで下さい。申し込み先及び問い合わせ先は、以下の通りです。

〒321-8505 宇都宮市峰町 350 宇都宮大学国際学部総務係

電話 028-649-5164 ファックス 028-649-5171

E-mail: koksomu@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

◎ 修士論文中間発表会開催

6月15日(水)に、恒例の修士論文中間発表会が開催されました。今年度は、国際交流研究専攻第1期生の初めての発表会で、例年通りに2会場で行われました。国際社会研究専攻(13名)の会場は1353教室で13:00から17:35まで、国際社会研究専攻(3名)・国際文化研究専攻(5名)・国際交流研究専攻(8名)の会場はイメージ・ラボで13:00から18:35まで開催されました。特に、イメージ・ラボ会場は立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。

◎ 「東アジア共同体の可能性をさぐる」一般公開講演会開催

8月01日(月)午後1時30分から3時まで、宇都宮大学 大学会館多目的ホールにて、ユーラシア論専攻の清水学先生(一橋大学教授、元宇都宮大学国際学部教授)による、宇都宮大学、みずほ財団、日本学生支援機構共催セミナーの基調講演が開催されました。

◎ 展覧会巡回展案内

非常勤講師の石澤良昭上智大学学長が監修された、世界遺産「大アンコールワット展ー壮麗なるクメール王朝の美」が7月3日(日)から8月28日(日)までの福岡アジア美術館(福岡市)を皮きりに、9月10日(土)から10月10日(月・祝)までの松坂屋美術館(名古屋市)、10月29日(土)から12月18日(日)までのそごう美術館(横浜市)を巡回します。プノンペン国立博物館所蔵の東洋のギリシア彫刻といわれる名品80点が一同に展示されますので、本物の味わいをぜひ楽しんで下さい。この巡回展は必見の展覧会ですので、石澤先生の集中講義を受講されたOB・OGの皆様にはぜひ足を運んでいただければ幸いです。

◎ 帰国報告

外国人教師(ハバナ大学教授)のペドロ・モンREAL先生が、8月31日付の3年間の契約期限満了につき、8月18日に離日し、キューバに帰国されました。先生からはラテンアメリカについて、英語による大学院の授業や世界遺産の講演から、貴重な示唆をいただきました。帰国後も、ますます、日本とラテンアメリカの交流にご助力いただきたいと思います。

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞6月21日(火)に前号で紹介した友松篤信教授の国際協力ハンドブックに関する記事「宇大生と教授共同執筆 NGO活動を47カ国で調査」が掲載されました。

2. UU now 第2号(2005. 07. 20発行)の8頁に『「東アジア共同体」は可能か』と題して、伊藤一彦教授の記事が掲載されました。東アジア在住の同窓生は、ぜひこの記事を一読の上感想を投稿していただければ幸いです。

◎ 国際学部だより

1. 平成 16 年度宇都宮大学重点研究に国際学部から 2 本選出

6 月 17 日(金)午前 9 時 30 分から大学会館 2 階多目的ホールにて、13 本の「平成 16 年度宇都宮大学重点研究プロジェクト発表会」が開催されました。発表者の所属内訳は、国際学部 2 本、教育学部 1 本、工学部 5 本、農学部 3 本、野生植物科学センター 2 本でした。国際学部からは、9 時 40 分から 10 時までの中村祐司教授の「地域社会と大学資源の相互活用方策をめぐる調査研究 ―宇都宮大学と地域スポーツ、文化活動組織との相互連携モデルの構築―」と午後 2 時 40 分から 3 時までの田巻松雄教授の「外国人児童の教育環境をめぐる問題 ―栃木県における現状と課題―」でした。

2. 国際学部創立 10 周年（学生受入れ 10 周年）記念植樹式

6 月 22 日(水)午後 1 時から国際学部 A 棟玄関左側(国際学部掲示板の向かって左側後ろ)に、学長・理事・監事をご招待し、学部教職員・大学院生・学部生によって、ハナミズキ(ミズキ科)が植樹されました。ちなみに、創設記念では、マテバシイ(ブナ科)が植樹されています。ハナミズキ(花水木)の HP (<http://www.geocities.co.jp/Outdoors/6286/hanamizuki.html>)によれば、「北アメリカ東部産の代表的な花木で、アメリカヤマボウシともいいます。アメリカハナミズキという呼び方は、ハナミズキとアメリカヤマボウシをちゃんぽんにしたもので間違いです。アメリカでの名称はドッグウッド(ダグウッド)、バージニア州の州花です。1909 年から数年にわたって、当時東京市長であった尾崎行雄がアメリカ合衆国に桜の苗木を贈りました。その返礼として 1915 年に同国から東京市に贈られたのが日本でのハナミズキのはじまりで、日米親善の木として有名になりました。そのときの原木は今も日比谷公園に残っているそうです。」という説明がありました。国際学部にもふさわしい選択の花木ではないでしょうか。

研究室訪問 07 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 7 回目には、地域文化形成研究講座所属の米山先生にお願いしました。

「研究を振り返って」

米山 正文

アメリカ文学を扱った学部の授業で、学生が「文学など役に立たず意味がない」と言ったことがある。しっかり取り組みもせずにそう言っていたので、懐疑的な態度をとったが、そういう見方はあるだろうと心の中では思っていた。不況のせい、活字離れのせい、年々文学の授業をとる学生数は減ってきている。授業中の態度も年々変わってきた。時代の流れなのだろうか。すぐれたアメリカ文学研究者をそろえていた東京都立大学人文学部も、元小説家の石原慎太郎都知事によって解体され、現在は首都大学東京の都市教養学

部・都市教養学科という学科に統廃合された。そろそろ「役に立たない」文学研究は廃業かなと思うこともある。

そもそも、なぜ自分はアメリカ文学などやってきたのだろうか。大学に入った時は確か犯罪心理学を勉強したいと思っていた。理由はよく覚えていないが、私が中学生当時は校内暴力の最盛期で、その体験が強烈に残っていたのかもしれない。しかし、心理学の授業を聴講したり本を読んだりするうちに、何となく心理学は自分に合わない気がしてきて、もう少し人間のリアリティが見えるように思った文学に関心をもっていった。1年次の終わりに学科を決めるとき、アメリカ文学を扱っている英米文学科に入ることにした。これも理由はよく覚えていないが（脳が老化している証拠である）、アメリカ文学に他国の文学にはない「新しさ」を感じたからだったと記憶している。別の言葉でいえば、近代を具現化しているような感じということになるだろうか。卒業論文では、メルヴィルという気難しい作家の『白鯨』（原題は *Moby-Dick, or the Whale*）という作品を論じた。この小説に登場するエイハブという狂った船長に、他の作品の登場人物にはない迫力を見出して、なんとか解明してみたいと思ったからだ。後に、エイハブには、旧約聖書「ヨブ記」のヨブ、シェイクスピア『リア王』のリア、ミルトン『失楽園』のサタン、というモデルがあることを知った。当時はそうとう不勉強だったわけだ。

学部は地方の国立大学だったので、あくまで作品の精読を重視する伝統的な方法を教わった。しかし、その後、東京の私大の大学院に進んで状況は一変した。先輩たちは競ってアメリカの文学批評理論を勉強しており、私も無知を馬鹿にされながらその波に飲み込まれていった。1970年くらいから20年ほどの間に、文学批評理論はめまぐるしく変化した。かつての美学的な新批評はすたれ、精神分析批評、マルクス主義批評、ディコンストラクション批評、フェミニスト批評、マルクス主義やフーコーに影響を受けた新歴史主義批評（イギリスでは文化批評）、ポスト植民地主義批評、同性愛文学の可能性を探るクイア批評と、次々に新しい理論が登場していった。こうした批評理論の洪水には圧倒されるばかりだったし、鈍い私が消化するのには大変な時間がかかった。それでも周囲に影響され、論文に取り入れてもいった。迷いもあった。こうした理論は文学テキストをある断面で鋭く切り取り、すっきりした論文を書くにはいいが、理論の切れ味を試すためにテキストを利用しているようにも思えた。こんにちまで理論を使うたびに、こうした迷いは消えない。しかし、次々に現れる新しい理論がそれまでになかった可能性を開いてくれたことも事実である。それまで無視されていた、階級や権力の問題、少数派や女性の視点、植民地化された人々の視点など、新しい観点から文学テキストを分析することを可能にしてくれた。新しい理論はまた、文学研究に歴史が重要であることもあらためて教えてくれた。たとえば『白鯨』の出版年は1851年、ペリーが日本の浦賀に来航したのが1853年である。ペリー来航の目的の1つは、日本に捕鯨船の寄港地をつくることであった。当時、捕鯨は国の経済を支える巨大産業であり、寄港地は極めて重要であった。『白鯨』のピーコッド号が最後に日本沖で白鯨と対決するという内容は、当時のそうした動向と無関係であろうか。ま

た、捕鯨水夫たちは国の経済を支えながら、社会的には軽蔑されており、そうとうな低賃金労働であった。40 年を振り返ってエイハブが「自分は立派になったのか、金持ちになったのか」と問うとき、そうした社会状況や労働条件を問題にしていることになる。しかし、作者はエイハブをあくまで 19 世紀前半の一庶民として描いた。エイハブにそうした観点はまったくなく、当時の大衆的世界観——この世のすべての事象は創造神によって司られている——のまま、自分の苦しみの背後に、自分だけを身障者にした憎むべき白鯨の背後に、創造神のみを見ていたのである。

様々な理論が現れようとも、変えられない大前提がある。文学は言語の芸術にすぎないということである。イギリス文化批評の創始者レイモンド・ウィリアムズが精読におそろしいまでに固執したのは、それをよく知っていたからだ。ところが、活字離れでテキストが読めなくなった英米の若い追従者たちはそれを忘れてしまった。言語や歴史に注意を払いつつ、今後も私はテキストを読んでいくことになるだろう。時代とともに読解力が落ちてきたことを嘆くまえに、自分の読解力が落ちないように努力しなければならない。未熟である限り、廃業などできそうもない。

知究人 05 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第 15 号の第 5 回目は、寄稿者を探しているところですのでお休みします。

フォーラム 第 4 号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2005 年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)今回は、高際研究室 OG・荻野こずえさんと田巻研究室・西出幸代さんをお願いしました。

日本語教師学習奮戦記

荻野 こずえ

私は平成 16 年 3 月に国際文化研究専攻課程を修了しました。現在宇都宮で英語圏の方々に日本語を教える仕事をしています。と言っても生徒さんは日本に仕事で駐在している方の家族なので、「日本を教える」より、「生活サポート」の方が仕事の中心になっています。宇都宮生まれですので、宇都宮のことはよく知っているつもりですし、長い間主婦業をしていますから、生活をサポートするのは得意といってもいいでしょう。英語を使う仕事であることにも満足しています。ただ、仕事の範疇に入っている以上、しっかりと指導法を身につけたいということと、資格を取りたいという理由で、昨年 4 月から通信課程で学んでいます。現在創価大学教育学部教育学科 4 年生、日本語教師コースに在学中です。いまだに大学生をやっているわけです。

大学生といえば、7 年前に宇都宮大学に社会人入学した時の入学試験の情景を思い出します。面接で志望動機を聞かれた時、「海外協力隊のシニアボランティアとして海外で日本

語を教えたいから」と大言を吐いてしまったのです。もちろんまるで作り事というわけではなく、夢ではありました。しかし、当時主婦業にどっぷり浸っていた私には、「大学で勉強する」だけで大ごとで、とても夢を実現する力が自分にあるとは思えなかったのです。宇都宮大学での4年間、その後大学院での2年間、いつも目の前に出された課題をこなすのに無我夢中で、自分の夢に向かって歩んでいるという実感はありませんでした。それなのに、いつの間にか導かれたように、自分の夢の方向に向かって進んでいるという気がします。

日本語教師の勉強は思ったよりずっと大変です。「〇十年間も日本語をしゃべってきたのだから」なんて甘い考えは通用しません。一から「日本語」という言語を見直し、学び直す気持ちでなければ、とても外国人に日本語を教えることはできません。「異文化コミュニケーション」のような科目は、宇大で学びましたからもちろん OK です。問題は「音声学」です。私にとっては「橋」も「箸」も「端」も皆おなじアクセントなのです。標準語のアクセントを覚えるのは中々やっかいなことです。それでも今秋行われる「日本語教育能力検定試験」に挑戦しようと準備中です。合格率はかなり低いので試しにという気持ちですが。

大学生活は、レポート提出と課目ごとの試験、スクーリング参加が課せられます。レポートはかなり程度の高いものが要求されます。試験も容赦なく落とされます。宇都宮大学より厳しいといってもいいでしょう。しかし、スクーリングで出会う友人はかけがえのないもので、参加するのが楽しみです。九州、北海道、海外から受けに来る方もいます。全体的に年齢層が高いので、宇都宮大学とはまた違った雰囲気を楽しんでいます。

「日本語教師の資格」・「検定合格」・「日本語教師としての数年の経験」という、海外で日本語を教えるための条件をクリアしていき、数年後にも海外での仕事に就くことができたなら、また皆さんに奮戦記をご報告したいと思います。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第4期修了生)

「あなたの夜は、私の昼 ～日本の反対側より～」

西出 幸代

日本の反対側に来て一月⁽¹⁾になります。時差ぼけにも次第に慣れ、ブラジル時間に体が適応してきました。皆様御機嫌いかがでしょうか。

私は、現在 JICA（国際協力機構）の日系社会ボランティアで、ブラジル・サンパウロ州はアラサトゥーバに来ております。地図を開いてサンパウロから北西に 530km 程行った所にあります。こちらは一応冬です。今日は梅雨も開け、暑いのではないかと思います。こちらは朝冷え込むと 13℃になったりします。この季節には、ブラジル国花のイペーの花がほのかな香りを漂わせています。（私は黄色より、ピンクや白のイペーの方が好きです。）日本から来たばかりの私には、快適なのですが、こちらの方々にとっては、かなり寒

⁽¹⁾ 7月28日の原稿受理当時です。（編集者）

いようで、それに相対する酷暑の夏を想像するだけで、今からのびてしまいそうです。

私はアパートメントの12階に住んでいるので、市街を一望出来ます。こちらの土の色は、赤く、したがって屋根瓦の色も赤。いつもかわいいなーと思いながら眺めています。ペルーのクスコも家々の屋根が赤かった気がします。スペインもそうだったかしら？

さて、こちらに来て面白いと思ったこと、異文化だな～と感じたことは…

1. ジーンズ・Tシャツには、必ずアイロンをかけること
2. 女性は、肌を露出することに抵抗がない
3. おそらく、ポルトガル語は、感情を表現する語彙に富んでいる
4. サラダボウルの国

1については、前任の方が、皺がついたTシャツ（もちろん日本では、アイロンをかけないのが普通ですから）を着ていたら、生徒が「どうして先生のTシャツは、アイロンがかけてないの？」と聞いてきたそうです。「ですから、先生もアイロンをかけてくださいね。」と親切に忠告してくれたのが、アラサトゥーバモデル校の先生です。

2については、とにかくこちらの食べ物は、肉・チーズが多く、その量も日本人には食べ切れないほどです。ですから当然皆さんふくよかなわけですね。ベトナムで増やした体重に更に体重を上乗せしている日々です。（私は2001年12月～2003年12月青年海外協力隊日本語教師として、ベトナムのハノイに派遣されていました。ベトナムは食べ物が美味しい！）持ってきたアオザイは着られなくなるでしょう。TV番組を見ていると、女性が男性を誘惑するシーンが出てきます。私は美しいものは大好きなので、TVの女優さんを見ている分には良いのですが、巷の皆さんはというと…一向に二段腹、三段腹を気にせず、ちびT（ぴったりしたTシャツ）を着、もちろん、そのTシャツとパンツの間からは、はみ出たお肉が「こんにちは」しています。「な～んだ。じゃ、私も、このお腹出してもOKな訳?!」醜い私のお腹なんか見せるものではないと思っていた私にとっては朗報？というか、この国の大らかさを感じている次第です。

さて3。先日2003年に放送の『世界ウルルン滞在記』で佐藤江梨子がレポートした弓場農場は、私の巡回地域なのですが、そこは様々な方が研究対象として訪れている場所で、芸術活動を取り入れた共同生活が営まれている所です。使用（生活）言語は日本語で、日本語を話す自然な環境ができています。そこで研究のため1年滞在されていた関西学院大学大学院博士課程に在籍されている方とお話することができました。彼の話では、論理的な話し合いをする時は、日本語を使い（日本語の社会的意味＝標準、伝統、正統、丁寧、真剣）、感情的なことを表現する時（荒々しさ、愛嬌、隠語、おかしみ、冗談）にポルトガル語を使用しているようだということでした。日本語とポルトガル語とでは、言語の背景にあるものが違いますから、そういった使い分けも出てくるでしょう。また、私が考えるに、日本語には、感情を表現する語彙が少ないということができないのではないかと思います。

す。日本語では、”I love you.”を表現するとしたら、「好き」になってしまうことに、こちらの日系人学習者は納得しないでしょう。日本は、以心伝心の国ですから、口に出して表現せずに来ている気がします。そういった気持ちを表現する語彙がポルトガル語に多く、日本語はというと、擬音語・擬態語が多かったりします。言語により得意分野、関心を持っていた、持っている部分が違うと言うことでしょう。それにしても、日本人の感情表現が乏しいと感じているのは、私だけでしょうか。この私でさえ、「好きなのか、嫌いなのか、楽しいのかどうなのか、はっきり言えば！もっと思いを伝えればいいじゃない。」とってしまうことがしばしばです。そういう私も、日本語では、表現しきれないことは、他の言語を使いたくなってしまうことがしばしば。ま、恥ずかしがりやの私ですから、自分自身も気持ちを伝えることについては不器用かもしれませんが。

4のサラダボウルは、様々な国から様々な人種の人々がやってきて住みついた国ブラジルで、異人種間の結婚も進んでいます。この点は、マレーシア等、異人種が住みながら、混ざらずに共存している国とは違います。人によっては、「やっぱり、混じりあってはいないよ。」とおっしゃる方もいるとは思いますが、ちょっと見たところでは、この人は、純粋の何人と言い切れる人が少ない気がします。一つの国の中でこれだけの人種を目の当たりに出来る妙とでも言いましょう。私の興味があるのもこの辺ですから、良く見てこようと思っています。では、皆様、時間とお金に余裕がおりになる方は、日本の裏側、サンパウロから飛行機で1時間のアラサトゥーバまでおいで下さいませ。大歓迎致します。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第1期在学学生)

◎ 課外活動共用施設事業資金募金状況経過報告その2

3月末に大学から発送された募金状況は、大学のホームページに詳細が公開されています。[\(http://www.utsunomiya-u.ac.jp/bokin/\)](http://www.utsunomiya-u.ac.jp/bokin/) 同窓会の募金状況(6月30日現在)は、国際学部 36件 218,000円の **1.4%**、教育学部 206件 2,243,000円の **14.7%**、工学部 190件 1,675,000円の **10.9%**、農学部 617件 11,175,000円の **7.3%**です。募金の全体から同窓会の内訳を見ますと、保護者 1,052件 5,517,600円の 18.3%、同窓会 1,476件 15,311,000円の **50.7%**、役員・教職員 214件 4,736,000円の 15.7%、企業・その他 134件 4,615,000円の 15.3%でした。同窓会と企業・その他の合計で 66%の割合ですが、今後の同窓会の活性化を促すことで8割、さらに全額負担ができるような体制づくりが理想ではないでしょうか。

編集後記：限られた時間でニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い：**
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。global@minakuru.net
